

プログラム名 : 算数科・数学科における、教師の指導力向上を目指す小・中・高一貫した研修モデルカリキュラム

## 1. 開発目的

今回、実施した教員研修モデルカリキュラム開発プログラムは、算数科・数学科における教師の指導力向上を目指すための研修の開発を目的としている。しかも、それぞれの学校での個別的な授業改善を目指すのではなく、小・中・高のカリキュラムを一貫して見通すことを前提としている。ここでいう教師の指導力には二つの意味がある。それは、授業力と教科理解力である。通常算数・数学の研修の場合、授業方法や児童・生徒理解の視点から協議される場合が多いが、この開発プログラムは、教育学研究者と数学研究者がコラボレートすることにより、独自性と連続性の両面を持った科目としての、算数・数学への教科理解にウェイトを置いた研修の開発を目的とした。これは、理数離れを食い止めるための一つの方法として有効であろうと考えているからである。

## 2. 開発方法

実際に、具体的な体系のある3つの研修項目（後述）についての教員研修を行いつつ、開発を行った。その開発方法としては、実際に教員研修を行いつつ、PDCAサイクルののっとなって、形を整えていくという方法をとった。すなわち、毎回の研修を行うに当たり、前もって、教育センター指導主事と打ち合わせをする。そこで、効果的な研修プランを作成し（研修の仮説的モデル）、実際に教員を相手に研修を実行し（仮説の検証）、研修後に被研修者からの意見聴取を行って改善点を見だし、それを次の研修プログラム開発のために生かす、という形式で行った。

今年度、このプログラムを実行する際には、参加教員にはあらかじめその趣旨を「みんなこれから研修を作ってくのだ」という形で伝えた。ところが、開発途中の研修に参加した教員には、研修方法を開発中という受け取り方は余りされていなかったようである。主として、「切り口が面白い研修」という受け止め方であった。

実際の研修では、全ての小中学校から最低1名の参加が得られるように要望を添えて、研修会参加案内が発送された。市立日新高校数学科教員にも同様の案内が送付された。後に詳しく述べるが、本研修モデルカリキュラムは、教員の算数科、数学科の授業をビデオ録画し、後日開催される研修会において、それを素材にグループ・ディスカッションを中心に進める点に特徴がある。授業のビデオ撮りに際しては、東大阪市学力向上事業連携校（小学校13校、中学校9校）を中心に依頼し、最終的には算数科9本、数学科4本のビデオが収録された。

【問い合わせ先】

学校法人 京都産業大学

連携推進室

〒603-8555

京都府京都市北区上賀茂本山

TEL 075-705-2952